

見て・聞いて・土木の動き

「土木情報システム関西セミナー2000」開催

「土木情報システム関西セミナー2000」は、関西支部の協力のもと、6月29日に約200名の参加を得て、関西大学100周年記念館（大阪府吹田市）において開催された。土木学会関西支部神田徹副支部長（神戸大学）の開会挨拶の後、「土木分野におけるITと情報共有技術」と題して、土木情報システム委員会情報共有技術小委員会のメンバーによるGIS、電子ドキュメント交換、インターネットの動向などIT（情報テクノロジー）を用いて情報共有を実現するため基礎的知識についてわかりやすい説明が行われた。また、特別講演ではGISの標準化に関してわが国における主導的な役割を担われている稲葉和雄氏（国土地理院）による講演が行われた。

講演内容は、「ITと情報共有技術」（皆川勝：武蔵工業大学）、「GIS基礎知識」（伊東一正：建設技術研究所）、「身近になったGIS」（浪川良春：横河技術情報）、特別講演「GISの動向と標準化の必要性」（稲葉和雄：国土地理院）、「電子ドキュメント交換のTPO」（古村文平：西松建設）、「わかりやすいXML」（中村真一：オリエンタル

コンサルタンツ）、「インターネットの常識と非常識」（小松淳：日本工営）、「土木に便利なサイト大特集」（宮田卓：東京電力）であり、GISにおける空間情報・ドキュメント情報・インターネット情報のそれぞれの技術に関し、参加者との質疑応答、情報の共有化が行われた。

今回のセミナーでは、業務における情報共有や将来的な情報共有のありかたを取りまとめた「情報共有技術小委員会 平成10・11年度活動報告書」が配布され、各講演に活用された。また、同報告書を電子化したCD-ROMが配布され、カラーの図版・写真入りで報告書の内容を参照できるようになっている。

最後に、土木情報システム委員会平田義則委員長（日本技術開発）より、セミナー開催に対する謝辞を述べ閉会となった。

（富士通エフ・アイ・ピー㈱ 高井喜浩）

JICA研修「港湾工学」コース開講

JICAが主催する「港湾工学」コースの運輸省港湾技術研究所での研修が今年も5月24日から始まった。全体では5月22日から9月中旬までの約4カ月におよぶ長期の集団研修であり、今年度は13か国14人が参加している。

（本年度の研修参加者はカンボジア、中国、コスタリカ、エジプト、フィジー、ガーナ、ケニア、メキシコ、モロッコ、ミャンマー、オマーン、ペルー、スリランカ（2人）の13か国）

この研修は港湾工学技術を諸国の研修生に教授し、自国における港湾の開発整備に貢献する中核的技術者の育成や諸国の港湾技術的諸問題の

解決、社会経済的発展への寄与等を目的として、運輸省港湾局をはじめ当所や多くの港湾関係自治体の協力を得て行っている。当研究所では5月24日から約2カ月間実施し、土質、構造、水工、海洋環境等港湾工学の基本的理論を学ぶことを主目的としている。研修講義のほとんどは当所の研修センターで行うが、研究所内の施設見学や個別研究室での研修も計画されている。

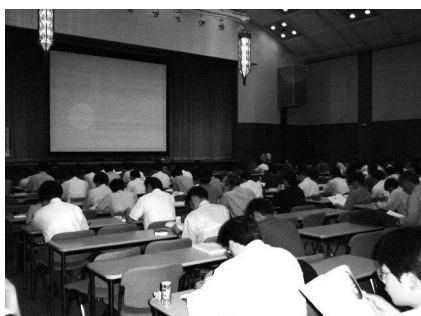
（運輸省 小山内英雄）

「阪神・淡路大震災調査報告書（全26巻）」の贈呈式開催される。

土木学会、日本建築学会、地盤工学会、日本地震学会、日本機械学会の5学会は、6月29日、兵庫県公館において「阪神・淡路大震災調査報告書（全26巻）」の贈呈式を開いた。本会からは、鈴木道雄会長、三好逸二専務理事、片山恒雄阪神・淡路大震災調査報告編集委員会委員長が出席した。5学会会長を代表して日本建築学会 岡田恒男会長から貝原俊民兵庫県知事に目録が手渡された。

同報告書の贈呈先は、兵庫県と災害救助法が適用された10市（神戸、尼崎、西宮、芦屋、伊丹、宝塚、川西、明石、三木、洲本）、10町（東浦、淡路、北淡、一宮、五色、津名、三原、緑、南淡、西淡）。

（土木学会事務局長 松尾全士）



台湾～日本 橋梁シンポジウム開催

2000年5月18日(木)、19日(金)の両日、台湾大学において橋梁の施工と管理技術に関するシンポジウムが開催された(主催:内政部営建所,台湾営建研究院)。台湾は、4月に土木学会海外支所の第1号が設立されるなど、日本の土木技術に高い関心を示しており、今回のシンポジウムでは、日本から2名が招待され講演とパネルディスカッションが企画された。招待講演のテーマは、「日本における品質管理システム」(國島正彦 東京大学教授)と、「日本における最近の橋梁架設技術」(渡邊泰充 清水建設土木本部副本部長)である。

台湾は今、台北-高雄の第2高速道路と東西方向の高速道路網を増設・延伸中であり、台北と高雄を結ぶ高速鉄道も工事が始まるなど、交通インフラが急ピッチで整備されつつある。橋梁架設の省力化・自動化に対する要求も強く、同時に品質管理の重要性も認識されている。今回のシンポジウムには約300名が参加し、関心の高さを示していた。

國島氏は、日本の公共工事の調達システムを「7つのキー」(制限付き競争,フェアシェア,予定価格,工事保証人制度,前渡金,天下り,コンサルタント支援)と「4つの常識」(工法協会,工区分け,お上意識,フェアシェアのためのJV),「3つのお化け」(公式には失敗はない,工期至上主義,目上を非難しない)で解説した。さらに、日本の技術競争力のなさは、前渡金制度に起因していると言及し、台湾でも一部の工



事で実施されているように、前渡金なしの週払いまたは月払い制度を導入することが、わが国技術者の能力向上、ひいては品質の確保に不可欠であると強調した。3つのお化けについては、台湾においても同様であるとの意見が会場から出され、台湾においても品質の低下が深刻な問題で顕著化しているとの認識が紹介された。

渡邊氏は、日本の橋梁市場はほぼ成熟しつつあるものの、より安く、より早く、より耐久的な橋を、という要求は強く、これに対し常に新技術を開発・実用化していると説明。わが国の最新の橋梁技術を紹介した。また、耐久的な橋梁を作ることには橋梁技術者の使命であるとして、グラウトの信頼性向上に関する日本における取り組みを紹介した。聴衆はいずれも若く、ほとんどが英語を理解し、新しい知識を仕入れようとする意欲にあふれていた。新設された土木学会台湾支所を通じ、更なる日本～台湾の技術交流が期待されることである。

(土木学会台湾支所幹事/清水建設(株) 数内俊雄)

メガフロートの技術開発が平成12年度に完了

メガフロートという言葉をご存じだろうか? 巨大な浮体という意味で、大きな鉄の箱を海に浮かべて、新しいタイプの人工地盤を提供しようというものである。

これまでも浮体構造物は浮き桟橋をはじめ世の中で数多く使われているが、大規模なものはまだない。大規模な浮体(メガフロート)が開発されれば、大型空港、大型コンテナターミナル、大型防災基地等への利用が可能になる。メガフロートには環境にやさしい、地震に強い、建設工期が短い、移動可能等の特長があ



る。もちろん従来工法にも優れた特長があるであろう。建設工法の選択肢を広げ、それぞれの特長を活かした効率的な社会資本整備の計画、実施が期待される。

今、東京湾の横須賀港に長さ1000mの鉄の箱が浮かんでおり、連日飛行機が飛んで多くの実験データが収集されている。4000mクラスの浮体式大型空港の実現を目指した実験用浮体空港モデルである。世界最大の浮体でギネスでも認定されている。

平成7年から12年にかけて6年間、メガフロート技術研究組合で研究開発が進められているが、いよいよ最終段階に入り完了間近になっている。

来る10月24日午後、東京ビッグサイトでメガフロートシンポジウムの開催を予定しており、6年間の技術開発の成果も報告される。メガフロートに興味のある方は下記にご連絡下さい。

メガフロート技術研究組合

港区芝三丁目3番15号

芝MONTビル5F

TEL 03-5443-1951

FAX 03-5443-1975

ホームページ

<http://www.dianet.or.jp/Mega-Float/>

(メガフロート技術研究組合 企画推進部)

富士常葉大学開学記念 附属風土工学研究所開設記念
風土工学シンポジウムの開催

5月27日(土)、静岡県富士市



に2000年4月に開学した富士常葉大学で大学の開学と附属風土工学研究所開設を記念して、風土工学シンポジウムが開催された。このシンポジウムは、防災は環境保全対策の第一歩であるとの理念に基づき、学問の枠を超えた学際的発想で取り組んでいく新しいタイプの大学としてスタートした富士常葉大学が、その教育・研究活動の一環として「これからの日本・21世紀のビジョン・風土論の視座と展開 環境と防災、そ

して地域活性化への思い」をテーマに開催した。シンポジウムは、竹林征三附属風土工学研究所長による「環境と防災、そして風土工学」と題して本シンポジウムの目指すものが解題されたのち、特別招待講演としてオギュスタン・ベルク博士による「風土性の存在的構造とその現代的意義」、岩井國臣参議院議員による「風土工学と「杜のくに日本」」、高橋裕東京大学名誉教授による「日本の国土史と風土」、五十嵐日出夫北海道大学名誉教授による「土木計画学の芽ばえから風土工学への展開」の4氏の熱のこもった講演が行われた。続いて高橋裕氏の総合コーディネートのもとに各講演者をパネラーとするパネルディスカッションが活発に行われた。当日は、国、静岡県、富士市および周辺市町等の地

元行政職員をはじめ、中学校の教員、主婦を含む幅広い市民層等、北海道から九州まで全国から土木学会、感性工学会等の諸学会員、大学や研究機関等の異分野の研究者や大学生、と多彩な参加者約300人が熱心に聞き入っていました。その後、懇親会が開かれ、盛況のうちに閉会した。講演内容等は、新聞やテレビ等のマスコミにより紹介され、各界から注目された。

(富士常葉大学附属風土工学研究所
若井郁次郎)

(風土工学とは、地域特有の風土・歴史・文化を土木施設の景観設計やネーミングデザイン等において適合させ、風土とハーモニーした個性豊かな地域づくりに資する土木事業を計画するテクノロジーです：編集委員)



作品番号：191020

九頭竜川と少年

企 画：九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会
 制 作：九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会
 完 成：1998年4月
 種 別：VHS, 16mm
 時 間：30分
 連絡先：建設省福井工事事務所調査第一課
 T E L：0776-35-2661
 F A X：0776-35-7946
 住 所：〒918-8015 福井市花堂南2-14-7

概 要：
 子供達に、治水事業の大切さをやさしく伝えるために、アニメーションを使い、暴れ川を竜に見立てて表現しています。自然の脅威と恵みが、主人公の少年の成長を通じて伝わってくる作品です。水害を知らせる太鼓の場面は、見るものに感動を与えるとともに、人々の勇気と智慧を子供達へ伝えようとしています。